特集

「エンタメ」を創る「ハレ」の場を築く

スポーツエンターテインメント施設の現在地

日本中のイベントに、スタジアムに、人の「声」が戻ってきた。今年5月、新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類感染症に移行し、それまでの3密の回避、行動規制が大幅に緩和された。人々がまちに戻り、集い、楽しむ日常の光景が戻りつつある。その強烈な熱気に人がいかにエンターテインメントを求め、焦がれていたかを改めて気付かされた。

スポーツイベントも例外ではない。国内でいくつもの国際大会が開催され、そのたびに競技施設に大歓声が響く。オーディエンスとアスリートが一体となって「ハレ」の場と時間の濃度を高めていく。エンターテインメントはライブだ。その歓喜の瞬間に立ち会うための「器」となるステージ、競技施設のあり方を探る。

文：楢田波留基　撮影：特記以外は中原一隆

スタジアム アリーナの新しい姿

追手門学院大学
上林功准教授

スポーツの楽しみ方が大きく変遷するなか、そのステージとなるスタジアムやアリーナも多様なニーズを捉えながら進化を続けている。今後求められるスポーツ施設の理想形、そして、建設業界がどのようにかかわっていくべきか、追手門学院大学の上林功准教授にお話を伺った。

集まりつながるためのスタジアム

―まずはじめに、スポーツエンターテインメントとこれにかかわるビジネスについて最近の動向をご紹介いただけますか。

日本のスポーツエンターテインメントは新たなフェーズを迎えています。転機となったのは、七年前に国によって示された「日本再興戦略2016」のなかでスポーツの成長産業化が明確に謳われたことでしょう。スポーツとは教育事業の一環であり、スタジアムやアリーナはその整備に莫大な費用を必要とするコストセンターという認識が改められ、収益を生み出すプロフィットセンターとして位置付けられたのです。これを契機に従来のスポーツを取り巻く環境が見直され、スポーツ分野の産業競争力を高めるために、スタジアムやアリーナの新しいあり方が検討・実践されるようになりました。

―スタジアム、アリーナの整備はどのような方向に進んでいるのでしょうか。

二〇二二年にスポーツ庁が策定した「第3期スポーツ基本計画」では、「する」、「みる」、「支える」スポーツの枠を超えて「つくる・育む」「集まりともにつながる」そして「誰もがアクセスできる」という新しい視点が示されました。また、「みる」スポーツが重要視されるようになり、これを楽しむ当事者以外も巻き込んで多様なステークホルダー、地域とともにあろうとするスタジアム整備が重要視されるようになりました。

ところがスタジアムやアリーナは劇場やコンサートホールと異なり、その設計において、観客スタンドの勾配やフィールドとの距離的な合理性、更にスペックと満足度の関係性といった知見が乏しく、研究もあまり進んでいません。そもそも建築基準法でも明確な分類がなされていない。リーグや競技団体が大会を開催するために必要な席数を規定している程度で、過去の整備事例から計画・設計がなされているというのが実情です。こうした点がスタジアムやアリーナの整備における課題だと認識しています。

追手門学院大学
社会学部 スポーツ文化学専攻
准教授
上林 功 *Isao Uebayashi*

第3期スポーツ基本計画

スポーツの価値を高めるための第3期計画の新たな「3つの視点」を支える施策

スポーツを「つくる/はぐくむ」

社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に見直し、最適な手法・ルールを考えて作り出す。

◆柔軟・適切な手法や仕組みの導入等を通した、多様な主体が参加できるスポーツの機会創出
◆スポーツに取り組む者の自主性・自律性を促す指導ができる質の高いスポーツ指導者の育成
◆デジタル技術を活用した新たなスポーツ機会や、新たなビジネスモデルの創出などDXを推進

スポーツで「あつまり、ともに、つながる」

様々な立場・背景・特性を有した人・組織があつまり、ともに課題に対応し、つながりを感じてスポーツを行う。

◆施設・設備整備、プログラム提供、啓発活動により誰もが一緒にスポーツの価値を享受できる、スポーツを通じた共生社会の実現
◆スポーツ団体のガバナンス・経営力強化、関係団体等の連携・協力による我が国のスポーツ体制の強化
◆スポーツ分野の国際協力や魅力の発信

スポーツに「誰もがアクセスできる」

性別や年齢、障害、経済・地域事情等の違い等によって、スポーツの取組みに差が生じない社会を実現し、機運を醸成。

◆住民誰もが気軽にスポーツに親しめる「場づくり」等の機会の提供
◆居住地域にかかわらず、全国のアスリートがスポーツ医・科学等の支援を受けられるよう地域機関の連携強化
◆本人が望まない理由でスポーツを途中で諦めることがない継続的なアクセスの確保

（スポーツ庁提供資料を基に作成）

まちと接続されるスポーツ施設

―先生は野球場の整備事業に数多く携わられています。スポーツエンターテインメントの視点からその変遷を概観していただけますか。

八〇年代後半までは多目的に使用できる全天候型のドーム球場が主流でした。その発祥は一九六五年に建設された米国テキサス州のアストロドームです。テニスやバスケットボール、コンサートにも供される球場です。しかし、屋根を架けて壁で覆ったドーム球場は差別化が難しい。判で押したような面白みのない球場、クッキーカッターと揶揄されるようになりました。そこでオリオール・パーク・アット・カムデン・ヤーズが一九九二年に開場します。ここはネオクラシカルな天然芝の青空球場。他のイベントとの併用という発想を捨てて本来の野球の楽しさを満喫することに特化した球場です。地域との共生を意識した公園のような球場で、「ボールパー

（提供：gettyimages）

（提供：PIXTA）

世界初のドーム球場とされるアストロドーム（上）は驚異的な建築物として世界的な注目を集め、ハリケーンの避難場所としても活用された。しかし、ドーム球場が主流になるにつれ、クッキーのぬき型で成形された、判で押したような画一的なデザインが批判されるようになる。そんななか、オリオール・パーク・アット・カムデン・ヤーズ（下）が開場。煉瓦と鉄骨からなるネオクラシカルなこの球場は新古典主義のスタジアムとして歓迎され、観客動員数を飛躍的に高めた。

ク」という言葉もこの頃から使われるようになりました。隔絶された施設ではなく、競技の専門性と臨場感を創出しつつまちと連続する球場の視点が生まれ、アメリカ国内のみならず日本も追随することになります。臨場感を増やすための改修事例としては、楽天モバイルパーク宮城やZOZOマリンスタジアムが、まちとのつながりという側面からはMAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島（以下、マツダスタジアム）や横浜スタジアムが好事例と言えるでしょう。

―スポーツをエンターテインメントの原点として捉え直し、まちとつながる施設としてスタジアムが求められているということでしょうか。

マツダスタジアムは、中年のおじさんたちがビールを片手にワ～っと応援しているようなスタジアム像から脱却しようという意識が設計当初からあったように思います。多様なニーズに対応する多彩なシートや場内施設を設けることで、より幅広いファン層を取り込むことに成功しました。「カープ女子」という言葉が象徴的ですが、結果として地域の往年のファンも数多く来場するようになりました。まちとつながる、周辺エリアを巻き込むことは、地域や社会に貢献するという姿勢ではなく、より多様なファンを集めることで成功を目指すという発想が求められると思います。

―今シーズンオープンしたエスコンフィールドHOKKAIDOも話題ですね。

スタジアムを核とするスポーツ産業が、地域内の事業者や企業といったステークホルダーの協力を得てスポーツエンターテインメントを成立させている成功事例として注目されていますよね。場内の宣伝にしても大企業のプロモーションだけではなく、地元のお菓子屋さんの広告が掲示されていても違和感がない、地域のスポーツ施設といったような、未来に向けてエンターテインメントと地域に根付いた施設のあり方が示されていると感じています。

―先生はスタジアムの都市化にも言及されています。まちづくりとスポーツ施設の関係性について教えていただけますか。

スタジアムやアリーナはスポーツ施設としてだけではなく、サステナブルな交流施設として捉えられるようになりました。地域の循環を促す公的な施設の一つとして、スタジアムがその循環・交流のハブとなることができるかがポイントになります。公共施設や商業施設、交通サービスなどを集約して、都市機能や生活機能の効率化を図るコンパクトシティの発想においても、ハブとしてのスタジアムの位置付けは必要になるでしょう。

哲学者のロラン・バルトは真ん中に「ヴォイド」という巨大な虚空がある都市空間のあり方を説いています。都市がドーナツ状になっていて中心の虚空を巡る回廊を環流するように循環が発生するという考え方です。広大なスタジアムは都市空間のヴォイドになり得る。都市の回遊性を生み出す装置としての可能性が高いと考えています。

まちづくりを視野に入れた持続可能なエンタメ施設を

―エンターテインメント施設やスタジアムが都市開発、まちづくりの核として位置付けられるなか、建設業界はその整備にどのようにかかわっていくべきでしょうか。

スタジアム改革が顕在化した背景には二〇二一年の東京五輪の開催がありました。このビッグイベントが終わった今、スポーツビジネスで地域を本気で変えていこうと志す人、特に若い世代が虎視眈々と自分たちが成し得ることを狙っています。そうした動向に建設業界が連携していくことは重要だと考えています。

マツダスタジアムは竣工から一四年を迎えましたが、毎年オフシーズンにはどこかに手を入れ続けています。メンテナンスだけではなくトレンドを見極めながら、ファンから飽きられない施設として進化し続けようという姿勢は、スポーツエンターテインメント施設に共通するものです。

更に最近はデジタルツインなどの仮想空間上にスタジアムを構築して様々なシミュレーションを展開し、可能性のある施策をリアルな空間で実践しようとするSFめいたことも展開されるようになりました。BIMの技術を駆使すれば新たなスポーツマーケティングの道を拓くこともできるでしょう。建設業界にはデータサイエンスも踏まえ、都市計画や地域づくりも視野に入れて、スタジアムやエンターテインメント施設のあり方を提案する力があります。スポーツやエンターテインメントの社会的価値を高めようとする取組みについてハード整備の側面から積極的に発言、関与してほしいと願っています。

横浜スタジアムのモットーは市民に開放された野球場。スタジアムは地元の企業や教育機関と連携した「都市化」、ファンと共に賑わいを創出する「共創化」の核になり得ると上林氏は話す。（提供：㈱横浜DeNAベイスターズ）

今後はエンターテインメントの遠隔臨場感もキーワードになる。仮想空間での疑似体験がリアルな次元に移植され、新たな楽しみ方が生まれる可能性がある。（提供：ソフトバンク㈱）

2009年に新設されたマツダスタジアムは新古典主義ボールパークの思想も受け継いで設計された。
カップルから家族連れ、もちろんビールを片手にした往年のファンたちも野球本来のライブ感を堪能できる。
（提供：PIXTA）

地方競馬に新たな歴史を刻む

株式会社よみうりランド
大成建設株式会社

「遊びを、まん中に。」置く地方競馬場

千葉県船橋市にある船橋競馬場が開場したのは一九五〇年。前身である柏競馬場の伝統を引き継ぎ、長きにわたって大井、浦和、川崎の各競馬場とともに南関東公営競馬の一画を成してきた。土地と施設は㈱よみうりランドが所有、競馬を主催する千葉県競馬組合がこれを賃借するスキームで運営されている。コースと客席の距離が近く臨場感にあふれる観戦が評判で、夕暮れ時から開催されるハートビートナイターもファンの人気を集める。

今でこそ「ららぽーとTOKYO—BAY」をはじめとする大型ショッピングセンターや住宅街に囲まれ、高速道路やJR線、京成線の駅からも至近の都市型競馬場だが、開場当時は埋立地の海岸際、コースのすぐ向こうには東京湾の海が広がっていた。競走馬たちは海岸で調教され、火照った馬体を海水で冷やしていたという。

そして今、開場から七〇年余りを経て、この歴史ある地方競馬の殿堂はより幅広い世代が楽しめる次世代型競馬場として生まれ変わろうとしている。現在のスタンドは完成から約半世紀が経過し、耐震化も課題となった。二〇二四年春の完成を目指して大規模な改修工事が展開されている現地で、よみうりランド船橋競馬事業部の山田俊彦課長にお話を伺った。「よみうりランドのスローガンは『遊びを、まん中に。』。当社が展開する遊園地やゴルフ場などすべてに共通するテーマです。エンターテインメントは気持ちを和らげ、人生を豊かにする。その仕掛けを提供することが我々の使命です。船橋競馬場も競馬ファンのすそ野を広げ、日々楽しく、そして安全に楽しんでいただけるよう大規模改修に着手しました」。

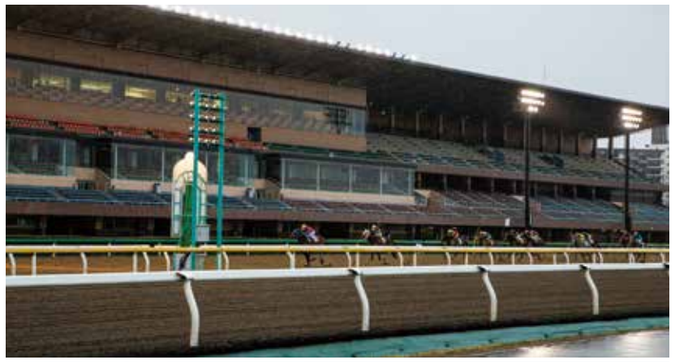
開場当時の船橋競馬場。すぐ南側に海が迫る。ここは日本におけるオートレース発祥の地でもある。馬場の内側にもう一つのダートが設けられそこではオートレースが開催されていた。ファンにはたまらないエンターテインメント施設だ。（提供：㈱よみうりランド）

現在のスタンドは二期に分け全体を建て替える。工区を半分に分割し、先に完成したスタンドを供用しながら残り半分の施工を継続する。最終的には既存スタンドを解体した跡地にS造五階建て、延べ約一三、七〇〇平方㍍の新スタンドと付属棟を新設。耐震補強を施したコンパクトかつ機能的なスタンドの一階部分に管理設備を集約し、二階以上に見晴らしの良い客席を配置する。観客、競走馬、運営者の動線を完全に分割して機能性、安全性を高める。水道や電気の防災機能を強化し、災害時には一時避難場所として地域市民に開放することも想定している。

更に緑豊かな芝生広場や子どもたちの遊具、馬と触れ合えるエリアの整備など「競馬場のパーク化」を図り、周辺の商業施設などとのシナジーでエリア全体の活性化、賑わいの創出を目指す。このリニューアルプロジェクトのコンセプトは「まちとの共生」だ。ららぽーと側には場内の様子が伺える開放的な入場門も新設される。山田課長はこう抱負を話す。「かつてはギャンブルの印象が強かった競馬ですが時代は変わっています。カップルや家族連れの方も増えました。まちに開かれた明るいイメージの入場門を新たに設けて『一見さん』を招き入れ、持続的なファンになっていただきたいと考えています」。

二〇二二年二月にスタンドA棟が完成、グループで楽しむことのできる指定席などが稼働を始めている。来場者が観覧する新スタンドの真横で残るB棟の建設が進んでいる。

全体としては従来のスタンドよりコンパクトな仕様になる。「馬券のネット購入が定着したことから競馬場のコンパクト化が進んでいます。そうすることでお客さまと競走



かつてのレトロな競馬場（写真上）は明るく開かれたスタンドをシンボルとして生まれ変わる（写真中）。旧スタンドの半分を解体して新スタンドを建設。これを開場しながら残り半分の解体、施工を継続する。現在、東側のスタンドを建設中（写真下）。すぐ近くに厩舎がある。競走馬に配慮して騒音や振動に細心の注意を払う。（上・中写真提供：㈱よみうりランド）

株式会社よみうりランド
船橋競馬事業部 施設課
課長
山田 俊彦 *Toshihiko Yamada*

上／既に完成した西側のスタンドは供用されている。新スタンドの３階は来賓室、４階が馬主室。ガラス張りで全体を眺望できることが前提となるため、先行した供用部と継続する施工部の間に視界を遮るエキスパンションジョイントを設置しない特殊な工法が採られる。
下左／VIPエリアからはダートの全景を見渡すことができる。目の前がゴールだ。ダートと観覧スペースの近さが類まれな臨場感を演出する。
下右／スタンドの意匠はもちろん競馬場のパーク化にも設計コンセプトの重心を置いていたと伊藤室長は話す。完成予想図からその意志が伝わってくる。（提供：㈱よみうりランド）

馬の距離をより近付けることもできます。このプロジェクトは新入場門をはじめとする開かれた施設にすることと耐震化、そしてコンパクト化の三本柱が軸になっています」と山田課長は話す。

競馬場のローリング施工に挑む

この改修事業の最大のポイントとなるのが競馬開催を継続しながらのローリング施工だ。工事を担う大成建設㈱の垣花宏亮所長はその難しさをこう語る。「午前二時から朝九時半までは競走馬の調教が行われるので、作業開始はそのあとになります。ウィークデーは他の地方競馬の実況中継をご覧になるお客さまが来場される。場外馬券場の機能を維持しながらの施工になるので工程管理に細心の注意を払っています」。よみうりランドもコロナ禍の無観客開催をはじめ工夫しながら運営を継続してきた。レース開催中は工事を中断し、工程を厳密に管理しながらの施工になる。運営者と足並みを揃えて施工を進めることが最大の課題だと話す。

大成建設株式会社
船橋競馬場大規模改修工事
作業所長
垣花 宏亮 *Kosuke Kakihana*

施工は競走馬ファーストが大前提だ。同競馬場の厩舎では約六〇〇頭の競走馬が管理されている。デリケートな馬が嫌う振動や騒音には最大限配慮する必要がある。馬の気持ちを理解することはなかなか難しいと笑いながら垣花所長はこう話す。「施工計画について馬と相談するわけにもいきません。当社はこの現場以外にも馬にかかわる施設建設の実績があるので、そうした現場の経験者を招聘して馬に生理的、心理的な負担をかけないよう万全の体制を敷いています」。

設計を担った設計本部の伊藤真樹設計室長は、プロジェクトのコンセプトについて、観客席スタンドの構造にも増してこの競馬場の「パーク化」に意識が向いていたと明かす。「馬券はネット購入が主流になったとはいえ、実際のレースはこの場でしか体験できません。多様な層にそのライブ感を体感していただき、同時に周辺のまち並みも楽しんでほしいですね。更にギャンブルのネガティブなイメージを払しょくし、明るく開放的なイメージをいかに演出するかをメインテーマとして捉えています」。周辺の商業施設や駅周辺を含めたエリア全体のバランスを重視し、高付加価値の競馬場のあり方から検討を始めたという。

エリアの活性化をけん引するエンタメ施設に

施設を供用しながら施工を進めるなか、次々と課題が顕在化する。設計部門と施工現場が並走するフォーメーションはある意味必然と言える。山田課長はこう説明する。「専門性の高い競馬場建設にはこれに特化した設計者も存在しますが、型にはまった競馬場づくりはしたくなかったので、デザインビルドを前提としたコンペを実施しました」。その競合を制したのが大成建設だった。同設計本部の浅野晃宏アーキテクトはこう振り返る。「一つの施設を半分ずつ建てるという経験は初めてのことでした。先行部分が運営されているので施工中にも様々な課題が顕在化してくる。状況が刻々と変化するなかその都度解決策を打ち出してクリアしています」。工期は長期にわたる。この間、受発注者が胸襟を開いて意見を戦わせながら柔軟に対応する体制が築かれてきた。伊藤室長もこう意気込む。「フェンスの仕様など細部について今後検討、提案する要素がたくさんあります。設計施工一体の工事だからこそ対応可能な側面が大きい。これからもますます面白くなると感じています」。

大成建設株式会社
設計本部 建築設計第七部
設計担当部長
設計室長（スポーツ・文化・交通インフラ担当）
伊藤 真樹 *Masaki Ito*

大成建設株式会社
設計本部 建築設計第七部
設計室（伊藤）
アーキテクト
浅野 晃宏 *Akihiro Asano*

山田課長はららぽーとを運営する三井不動産㈱をはじめ近隣の事業者とも今後の街区の振興策について検討を始めたという。今夏はフードイベントやフラダンスショーも開催して好評を博した。「ららぽーとは昼間のショッピング施設、競馬場はナイターを主とした夜間のエンターテインメント拠点。相互に往来して一日中楽しめるまちにしようと考えています」。

ＪＲ南船橋駅周辺では大型再開発プロジェクトやアリーナ建設も進められている。船橋競馬場がまちの活性化に向けた起爆剤の一つになることは間違いなさそうだ。

上／コンクリートのひな壇があるだけだったパドックの観覧席は大型デッキを連ねた劇場型観覧席に改修、大型ビジョンが迫力ある競走馬の雄姿を投影する。
下／３、４階からは直接屋外に出てパドックを見下ろすことができる。「馬のコンディションを知るには馬と同じ高さの目線が第一、というハナシもありました」と垣花所長は笑う。

都市公園をベースボールパークに

株式会社久米設計
株式会社熊谷組

スポーツをきっかけとした賑わい創出を

二〇二三年十二月、阪神電気鉄道㈱と㈱阪神タイガースが新たな二軍（ファーム）施設を兵庫県尼崎市の小田南公園に建設することを発表した。尼崎市と阪神グループが連携して小田南公園全体を「ゼロカーボンベースボールパーク」として整備する計画だ。公園の中央に、阪神タイガースのファーム本拠地となる球場「日鉄鋼板SGLスタジアム尼崎」や選手が練習で使用する「タイガース練習場」を新設、東側には一般市民用の公園野球場、西側には芝生公園や園路を配置。南側には室内練習場や選手寮兼クラブハウスを設ける。

公園野球場ではキャッチボールを楽しみながら、阪神タイガースの選手が試合や練習に励む雰囲気を身近に感じることができるだろう。園路は日常的な散歩やランニングに、芝生広場は地域住民に開かれた憩いの空間として活用できる。公園全体がスポーツをきっかけとした地域の賑わい創出の場として生まれ変わろうとしている。

各施設には脱炭素を目的とした多様な設備やシステムを導入。持続可能な社会の実現に資する新しい野球場、公園を目指していく。施工を担う㈱熊谷組はゼロカーボンベースボールパークパートナーの契約を締結しプロジェクトをけん引。ファーム施設を含む園地全体の設計を担うのは㈱久米設計だ。

ここにしかない新しいスタイルのベースボールパークが二〇二五年二月、尼崎に誕生する。

阪神タイガースのファーム球場は西宮市の阪神鳴尾浜球場、通称「タイガース・デン」だ。ウエスタンリーグの試合はコアなファンで賑わってきたが、1994年竣工のこの施設の老朽化は否めなくなった。（提供：阪神電気鉄道㈱）

基本的な取組み（予定）

ゼロカーボンベースボールパークを拠点に雨水・井水の活用やペットボトル・プラスチックカップの回収リサイクルといった環境に配慮する取組みを展開。室内練習場はZEB Ready、スタジアムはZEB Orientedの認証取得を目指す。（提供：阪神電気鉄道㈱）

都市公園と連動するスタジアム

ファーム施設の目的はあくまで選手の育成だ。設計を担当する久米設計の佐藤行彦主査は施主である阪神グループから求められた事項についてこう振り返る。「まず第一に選手ファーストの施設であることが絶対条件でした。トレーニングエリアを可能な限り広く確保することも求められました。グラウンドは大きさも方角も甲子園球場と全く同じで、将来甲子園で活躍する選手が現地をイメージしやすい仕様になっています」。

しかし、そのスタジアムが都市公園内に置かれることで園地とのつながりを重視する視点も欠かせなかったとこう続ける。「公園としての機能も充実させなければなりません。地域住民や来園者のための芝生広場やその他の外構も含め、公園全体がスタジアムや建物と連動することにも主眼をおいて設計に臨みました」。

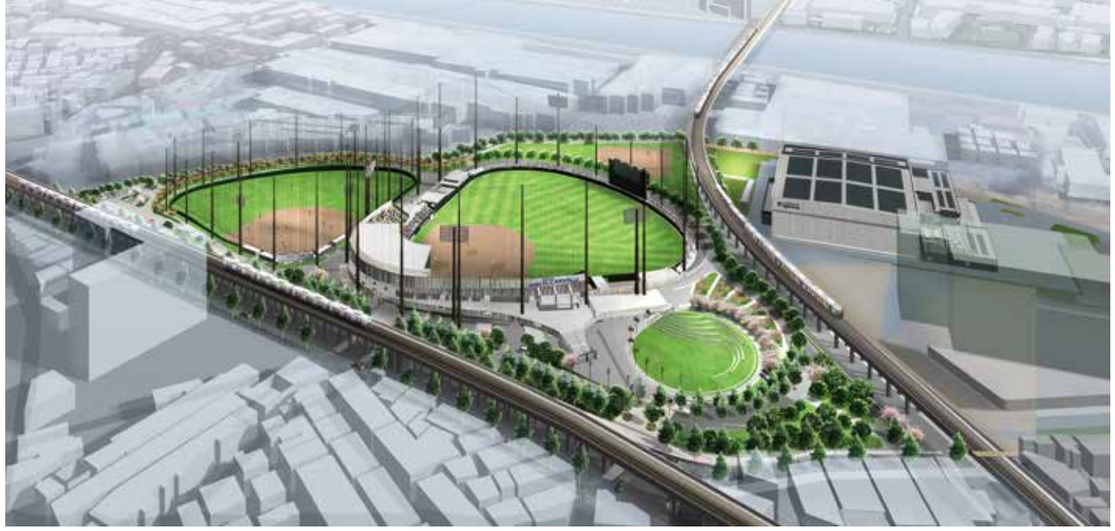
更にそうした公園内の野球場には、選手のプライバシーやセキュリティにかかわる課題もある。選手たちの躍動感を間近に体感できる野球場を目指す一方で、選手の練習を妨げないよう目隠しフェンスで遮蔽するという意見もあった。「どちらの意見も正しい。その間の最適解を模索しました。基本的にはファンと球場、選手との距離が近い施設が理想だと考えたので園路に面する練習場のフェンスは腰高ほどの高さにし、野球場の客席は一塁側を阪神タイガースのホーム席として全体の七割の客席数を集約するなど、積極的に提案してきました」。今までより身近に選手を感じることができるかもしれないと佐藤主査は話す。

株式会社久米設計
設計本部大阪支社
主査
佐藤 行彦 *Yukihiko Sato*

人と心を動かすエンタメ施設

設計スタッフは甲子園球場はもちろん、エスコンフィールドHOKKAIDOなど国内のスタジアムを丹念に視察した。久米設計はかつて福岡ソフトバンクホークスのファーム球場の設計を手掛けた実績がある。そのスタッフとも連携して細部を詰めていった。佐藤主査はその経緯をこう説明する。「スタジアムの客席は自治体の火災予防条例で、『背もたれがあるシートを並列する場合は一〇席が上限』といった規制や、奥行・幅の寸法など様々な条例があります。その規約を担保

阪神本線と阪神なんば線に囲まれた小田南公園で新球場の建設が進んでいる。（提供：㈱熊谷組）



建物の屋上や野球場のバックスクリーン背面に太陽光パネルを設置し、年間73万kWhの発電を見込む。高性能断熱材、複層ガラス、高効率空調機なども採用する予定だ。新球場の名称は日鉄鋼板㈱がネーミングライツを取得し「日鉄鋼板SGLスタジアム尼崎」に決定した。（提供：㈱熊谷組）

上／室内練習場の壁面には高断熱でCO_2排出量の削減に効果を上げる日鉄鋼板㈱の「耐火イソバンドPro」が採用される。（提供：㈱熊谷組）
下／現在のファーム球場の客席数は約500席。新たなファーム球場は約3,600席だ。アクセスも格段によくなり多くの熱いファンを呼び込むことになる。鉄道の高架に配慮した空にそびえるような高い防球ネットはこのスタジアムの特徴だ。（提供：㈱熊谷組）

しながらどのようなレイアウトが合理的なのか、いくつもの球場の仕様を洗い出し、更にホークスの球場のつくり方も参考にしながらスタジアムとしての機能を満たすスペックを検討し、提案につなげていきました」。

多くのスタジアムの現地調査を重ねる過程で、エンターテインメント施設の理想形も見えてきたと佐藤主査はこう話す。「この夏は世界中で国際大会、ワールドカップが開催されました。世界的にもスポーツは人が動き、往来を促すエンターテインメントです。その舞台となる施設も規模や状況に応じて、臨機応変に対応できる建築物であるべきだという想いを強くしました」。スタジアムのなかにサウナや保育施設、ホテルが併設されるトレンドを見ても、今後のファン層の拡大は明らかだろう。更に物理的な移動、動線への配慮だけではなくオーディエンスの感情をも動かし、熱く震わせる施設が求められている。「開かれたスタジアム、エンタメ施設の理想形を確立することは容易ではありません。今まで以上に斬新な発想に基づいた提案も必要になると思います。建設業に携わる者として発注者、設計者、施工者の垣根を越えて互いに知見を高め合い、将来にわたって愛され続ける施設を残していきたいと考えています」。佐藤主査はそう話してくれた。

株式会社熊谷組
関西支店阪神タイガース球場施設工事所
工事所長
遠藤 孝治 *Koji Endo*

水平方向に広がっていく建築

阪神タイガースのファーム球場は阪神本線と阪神なんば線が分岐する大物駅から徒歩約五分、両路線の高架に挟まれた立地に建設される。基礎工事が進む広大な現場で熊谷組の遠藤孝治所長が出迎えてくれた。「プロ野球のスタジアム建設に携わることはこの業界でもめったにありません。タイガースファンとして今後残り続けるスタジアムの現場に立てることはとても名誉なことです」と破顔した。

熊谷組は二〇一〇年に環境省より建設業界で初となる「エコ・ファースト企業」に認定された。以来、脱炭素社会への移行、循環型社会の形成、生物多様性への配慮に向けた多様な取組みを展開している。その企業姿勢が評価され、競争入札を制してこのゼロカーボンベースボールパークの構築に参画することになった。

とにかく広い現場だ。「四角いビルの建築とは根本的に発想が違う。ホームから水平方向に広がる形状の特殊性を踏まえる必要があります。墨出し一つとっても通常の建築現場とはプロセスが異なってきます」と遠藤所長は話す。

第一工区は線路に囲まれ小田南公園の敷地内のファーム球場と公園野球場、これに付随する園路や広場などの整備、第二工区は阪神なんば線の高架を越えた南側のエリアでトレーニングスペースや選手寮、クラブハウスなどが新設される。

現場では工事車両のアイドリングストップや入退場時の洗浄、リサイクルを目的とした廃材の分別、水道の使用を抑制する井戸水の活用など、できることはすべて展開していると遠藤所長は話す。

住宅街に近く、しかも鉄道近接工事であることから周辺への配慮が大きな課題になる。都市部にスタジアムをつくる、その難しさが遠藤所長の言葉の端々ににじむ。

エリアの活性化をけん引するエンタメ施設に

現場への注目度も高い。憩いの場、閑静な公園に、巨大なエンターテインメント施設が建設されることに周辺からは懸念の声があったことも事実だ。しかし、アンケートでは多くの好意的な意見が寄せられた。SNSには電車内から撮影された写真や動画が頻繁にアップロードされているという。「これだけ広い現場で搬入路は住宅街に近い側道しかありません。細心の注意を払う必要があります。何よりも地域住民の皆さんのご理解があって成り立つ現場です。その期待に応えたい」と遠藤所長は話す。

工期は二十三カ月、決して余裕のある工程ではない。今後、躯体工事が本格的になり、現場は縦方向に上がってくる。複雑な構造だけに数々の課題も浮上するだろう。

それでも開場を遅らせることは絶対にできない。「来年は大阪万博が動き始めます。人材も資材もひっ迫することが予想される。とにかく早めに手配をしてやりきらなければなりません」と遠藤所長は気を引き締めていた。

ファーム球場にまで足を運ぶオーディエンスは筋金入りのファンだ。再来年のシーズン、観客と選手たちがこの球場で新たな阪神タイガースの歴史を刻み始める。その完成を誰よりも心待ちにしているのは、今この建設現場に携わるすべての人たちかもしれない。

来客用のヘルメットもタイガース仕様のオリジナル。